

最近における癌の化学療法の進歩は誠に目ざましいものがある。

特に急性骨髄性白血病で5年生存例が出てきたというようなことは、20年前にはほとんど全く考えられなかったことである。固型癌についても、ときに劇的に消失してしまう巨大小児癌は言うに及ばず、大人の固型癌でも、ときには、手拳大以上の腫瘍が化学療法で魔法のように消えてしまっ驚くことすらある。しかしながら、これらは、新しい薬が開発されて、それがちょうどある種の癌にぴったりと合った場合なのである。全く同種としかいいようのない種類の癌でも、患者によっては、効くこともあるし、効かないこともある。そこが幾分菌痒いところなのではあるが、それでも、昔では想像もできなかった進歩であることには変わらない。

しかしながら、相手が、われわれの専門とする胃癌ということになると、化学療法は、今まで何と無力であったことか。

化学療法効果判定基準を作るに際して、何を著効とし、どれを有効とすべきか。不変とは、微効とは、また、無効、進行などなど、それらの定義づけに、どれだけのエネルギーを使い、議論を重ねてきたことか。これ即ち、本当によく効く薬がいまだない証拠なのではなかろうか。

しかし、本号に収録された症例は、専門医の努力の結晶であり、現時点における貴い経験の記録なのだ。将来への一里塚なのである。

---

＜編集＞ 早期胃癌研究会